

元曉法師の淨土教

宮田 隆 淨

(一)

元曉は一般的には華嚴宗の人と云われているが、瑜伽仏教の色彩も濃厚であり、又淨土教をも宣布した、仏教各派に通じて学匠であつて更に特殊な学風の持主である。大体元曉は義湘と同じく智恵の教を受けているのである。彼に淨土教關係の著書が見られるのも不思議ではない。而して彼の題大なる著書の中に淨土教關係の書として挙げられるのは、「阿彌陀經疏」一卷、「阿彌陀經疏」一卷、「遊心淨樂道」一卷、「弥勒上生經京要」一卷、等があり、淨土教の中でも阿彌陀仏に關係する「阿彌陀經疏」三卷に所載され又「遊心淨樂道」一卷は、淨土宗全書六卷に採録してあるので、今彼の淨土教を述べんとすることは本書を中心として、彼の淨土教義を解明するものである。

この遊心淨樂道は法然上人も選択集に引用されて、淨土教理史上に於いても重視すべきである。本書はその巻頭に掲げている如く遊心淨樂一略開七門として

初述ニ教起宗旨ニ定ニ彼土所在ニ三明ニ疑惑患難ニ四顯ニ往生因縁ニ五出ニ往生品教ニ六論ニ往生難易ニ七作レ疑復除レ疑

と七門に分別してその要旨を解説している。凡そ聖道門諸師の念仏義は、通途の修因果の道理

自力自援の法門を以て親津とするので、自ら浄土門別途の覓解とは異ならざるを得ないのであつて、極樂世界を志求する目的は、但だ娑婆世界の還縁が多くして修行成就し難いものを感じ、不還の極樂世界に往生して修行し成仏せんと期するに過ぎない。極樂浄土の教説の説は区々であるが、何れも凡夫の親土に生れることを許さず、或は唯心を説いたり、西方を認めるものあり、或は親念を勝として林名を劣と爲し、理を勝として事を劣と愚し、或は菩提心を正因として念仏を助業とする等、聖道門諸師の浄土教義は異説紛々として一統することか出来ないものである。こゝに於て元曉の教義も未だ凶暴の地正浄土教成立の以前であり、舊を摯取にあくと云う聖道門にあつての彼の彼土教は、華嚴の教理、或は唯識を離れであるのである。

こゝに特に問題とされてゐる浄土教の仏身仏土論、或は念仏論等を元曉は如何に解見してゐるかを解明せんとするものである。

(二)

元曉は智恵に教をうけてゐることは前にも述べた如くであるが、その智恵の説を承けて四種の浄土を分別し、又迦才等と同じく通報化の説を唱へてゐる。即ち遠心要衆道に依ると、

仏土四種融本無東西扣極多端方現此彼由是就論彼界所在一衆三衆分齊不同若依一衆極樂浄土是爲華藏世界諸攝何以故是十仏之土四融不可說故普賢因分所見無分齊故依三衆西方浄土通融四土

としてゐる。即ち元末浄土四融無碍であつて、彼此東西の別はないが、試みに浄土の所在を論

元曉の淨土教（宮田）

亦るときと、三業について論ずるときは自からその趣を異にするものである。即ち一業に依つて論ずれば極樂世界は菴藏世群海に擧せらるべきであつて、三業に依らば西方極樂は通じて四土を成ず。四土とは即ち法性土、實報土、受用土、變化土であるが、その中法性實報の二土は法界に遍滿せる眞如を指し、受用、變化の二土は三經所説の西方弥陀の淨土に相当すると論じている。即ち

一法性土ニ實報土ニ受用土ニ變化土ニ於中法性實報一味樂等周遍法界非餘所別受用變化酬願

衆惑隨機所難指方可得故小無壽經曰從是西方過十萬億土有世界
としている。又元曉の意に依れば西方弥陀の淨土は酬因感果の土であるから従つてその法位を指すことが出来、且つ弥陀陀經に説く極樂世界は正しく此の二土に当るとしているのである。又この極樂に就いて淨不淨の見地から四種相對に約して説いている。四種相對とは因果相對、一向不一向相對、純雜相對、正定非定相對であるが、尤一因果相對は自受用土を意味するものであつて、上述の法性實報の二土を指し、尤一不一向相對及び純雜相對は受用土を指し、又四正定非正定相對は變化土を意味するものである。之に依つて見るに元曉の意は存する所も亦三經所説の西方淨土にあつたものの如く、即ち西方淨土は如来の願行所生の淨土であつて彼の土に往生し得る者は自力に依るのではなく、須らく仏願に順じて起りて不退の土に生るゝものであると解すべきである。

又兩卷無量壽金剛經には四門を説明している。本文を訓読して以つて彼の意を伝へることをする。即ち

果徳ノ内ニ證シテ四門アリ、一ニ淨不淨門、二ニ色無色門、三ニ共不共門、四ニ法無漏門

ナリ、如一二淨不淨門ヲ明サバ、略シテ四對ヲ以テ其ノ階淨ヲ變サシニ、諸ク因ト果ト相
對ノ故ニ、一向ト不一向ト相對ノ故ニ、能ト難ト相對ノ故ニ、正定ト非正定ト相對ノ故ナ
リ、所言ノ因ト果ト相對ノ門トハ、謂ク金剛以還ノ菩薩ノ所住ヲ果報土ト名ケテ淨土ト名
ケズ、未カ菩薩ノ果趣ヲ離レハルカ故ナリ、唯仏所居ヲ乃チ淨土ト名ケ、一切ノ旁邊餘ス
ユトナリ滅スルカ故ナリ、此義ニ依ルカ故ニ仁王經ニ云ク三賢十聖住ニ果報ニ唯仏一人居
ニ淨土ニ一切衆生善住レ報盡ニ金剛一居ニ淨土ト、如ニ一向ト不一向ト不一向相對ノ
門トハ、謂ク八地以上ノ菩薩ノ住處ヲ淨土ト名クルコトヲ得、一向ニ三昧ノ事ヲ出テタル
ヲ以テ故ニ、亦四句一向ノ義ヲ具スルカ故ナリ、七地以還ノ一切ノ住處ヲ未カ淨土ト名ケ
ズ、一向ニ三昧ヲ出テタルニ非ハルヲ以テノ故ニ、或ハ願力ニ乘シテ三昧ヲ出テタル者モ
一向四句具足セハルカ故ナリ、謂一向衆、一向無失、一向自在、七地以還ニハ出觀ノ時ニ
或時ハ報無起心ヲ生起シ、未邦四惑時ニ堪行ス、故ニ一向淨ニ非ズ、一向無失ニ非ズ、ハ
地以上ハ即ち是ノ如クナラズ、此義ニ依ルカ故ニ揚大衆ニ云ク出世法功能所ニ生起ト
紙ニ曰クニ衆治名ニ出世ニ從ニハ地ニ以上乃至仏地名ニ出出世ニ出世法名ニ世法對治ニ出
世法爲ニ出世法對ニ功能取ニ四緣ニ爲レ相、從ニ出出世法功能ニ生ニ起此淨土ニ故不下以
ニ衆歸ニ爲レ因乃至廣說スル故ナリ云々

と釈明している。又同景要に

前所說ノ四種門ノ中ニ、初一門ハ自受用土ヲ要シ、後三門ハ他受用土ヲ説ク、
と言っている。

この中に數音聲經の阿彌陀仏に父母ありと説かれている經文の会釈に於て、一は他仏所居の
元覺法師の淨土教（宮田）

元曉法師の淨土教（宮田）

化土であるとし、一は實報土に非ざるの義を以て通釈している、二小は他受用土として解釈を試みたものと察せらるるのである。而して九品は凡に彼國に生じたる人の各其の本の修因感果の相を示したものと爲して、上三、中三、下三の三輩を菩薩衆、声聞衆、人民衆に配している。即ち委細に云えば上品上生を十倍の終心、上品中生を十倍、上品下生を十倍以前、中品上生を四善根決分位、中品中生を三賢斷惑分位、中品下生を五停心已前の趣向の凡夫としてゐる、のみならず三衆の聖人、地前三賢並に二衆の七方便、乃至方便道已前の四衆男女、兼應八部等も但だ能く菩提心を発し専ら阿耨陀仏を愈じ、極土を厭い淨土を欣い、悟終に正念現前するものは皆往生することを得るごなし、又菩薩の往生にも上中下あり、二衆往生にも上中下あり、凡夫往生にも上中下あり、それに亦各々九品があるから、實に無量の差別が成り立つのである、二小は悉く彼が華嚴の教義に基づいたものと言へるのであらう。蓋し四十八願及び極土の教義はその中の凡夫を以て正生、聖人を以て兼生とするに在るのと云ひ且つ往生して正報莊嚴を愈じ、亦依報の淨土を受用することを得るのは、衆生自業の故辦する所でなく、但だ如来の本願力に由るものであることも明しているが、此等は主として迦文の説を承けたものと思ひしるのである。

迦文の事跡は明かではないが、元曉と同時代の先輩であり従つて、上述の如く淨土の分攝と云い、又その教義と云い、元曉所説の教義と一致しているところを思ふと、先輩である元曉が明かに迦文の教義にも導かれたものと見らるるのである。